

静かなるアイヌ

民族情報工学研究

井戸 理恵子

1. はじめに

北海道に生まれ育って、いつも不思議に思うことがありました。

それは北海道の地名や食べ物などアイヌの文化があちらこちらに鑲められているのに、その存在は遠く、空間的にも時間的にも不可侵なイメージが漂っていたのです。

その「不可侵」は語られることのない、「文化を奪われた者」のなんとも形容の仕様のない深い哀しみから来ることのような気がします。

やがて、自らの中でかつてアイヌの方々に護られてきた大地で生きていることへの感謝が大きく膨らみ、いつしか彼らの文化に立ち入ってみたい衝動に度々駆られました。

その衝動から、ここ数年に渡って研究している工学を「自然に学ぶ」とい

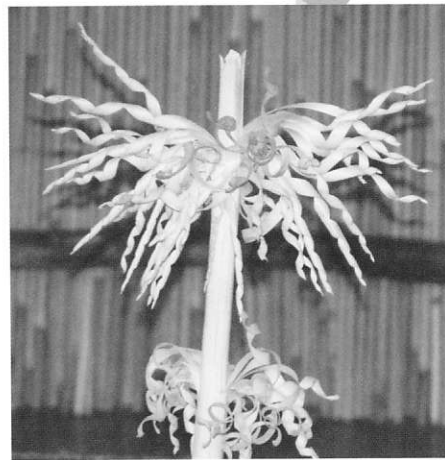
う立場から、「伝統に学ぶ」、「アイヌ文化に学ぶ」という目的をもって、彼らの文化を再度見直してみたいと彼らの文化に触れあうようになりました。

2. 縄文人の足跡（アイヌの言葉）

アイヌの文化は“形あるもの”をなにも遺さない文化と言えます。

必要な「もの」を自然から得、短期間で「自然に還っていくもの」の中で生活をしていました。「何も遺さない文化」は現代社会が築いてきた「人のエゴ」による価値観とは遠く、彼らの文化は軽視されてきました。

しかしながら、縄文より連なる彼らの文化はアイヌの伝統を守る人たちが、研究者の手によってほそぼそとではありませんが、現代にも息づき、土の中からではなく、リアルに感じ取ることが



木幣（イナウ）

可能です。特に彼らの遺した重要な「言葉」には未来への提言が幾重にも遺されているのです。

アイヌは「貯蓄」を嫌います。

「貯蓄」をするためには一時に多くの殺生が必要ですがこうした殺生は自然の摂理から外れ、「再生」に時間がかかります。

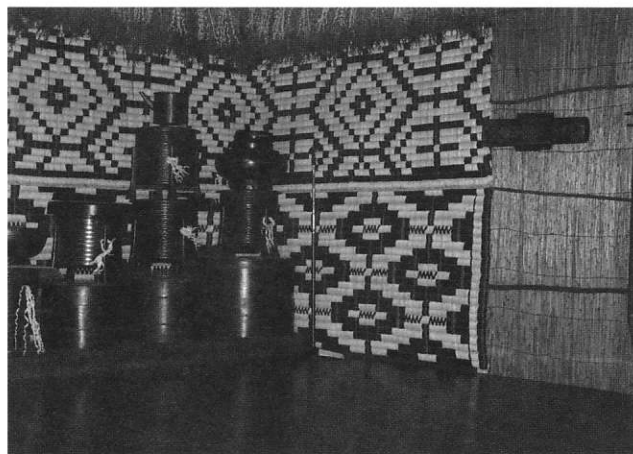
したがって、「貯蓄は罰が当たる」とされ、節度をもって生活していれば、そのときそのとき神様が天から降りてこられて必要なものを与えて下さると信じていました。

与えられたものはアイヌの様々な知見によって区別、保存、適材適所に使われます。

自然をよく観察していた彼らの知見は「神が与えてくれたもの」という謙虚さを持ち、大切に受け継がれていきます。現代の我々が認識するアイヌの文化は「裕福では無かった」かも知れませんが、彼らにとっては「神が与えてくれた知見」言葉を受け継いで行くこと、それ自体が長い伝統の中で培われた一番の幸福だという判断だったのでしょう。

アイヌ語には霊（たましい）が宿っており、文字にした途端にその中から霊がなくなってしまう、即ち「生きた言葉」を大切にしていたから、文字をもたなかったアイヌ。

ですから、最も尊敬されるべき人は「神を説得できる」程の美しい言葉を



和人（シャモ）との交易にて得た行器（シントコ）・アイヌの宝物



イオマンテ用の仔熊の檻（ベベレセツ）

もつ人であり、「美しい言葉は真理」なので人をも説得でき、そうした人が村を治めるのです。

武力の強い者、狩猟が上手な者よりも上位だったのです。

日常の対話の中でもみな慎重に言葉を選びました。

言葉は「人を殺す」こともできる武器と考えられ、迂闊なことは言っていない、言葉が一人で行動してしまふということとは危険なことである。

今という噂が広がるということなのでしょう。

確かに現代社会でも目で見た光景で死ぬことはなくても、人から言葉で攻められると人は難なく、死を選んだりするものです。

根元的なことなのかもしれません。またこうした裏付けとして、アイヌ語の「ウコ・チャ・ランケ（互いに・言葉を下ろす）」という表現があります。

この言葉は「武力で物事を解決する」のではなく、「対等に論じ合って問題を解決する」というアイヌ社会の基本に関わる思想を反映しているといわれています。

北海道アイヌの遺跡には多くのチャシと呼ばれる砦があり、そこで戦が行われていたと以前は考えられておりました。

しかし、砦は我々が考えるような戦と関係していたのではなく、考古学的

にも殆どの人骨に傷がないことから話しをつける場所だったということがわかります。

ではこうした優れたアイヌ語がどうして衰退していったのでしょうか？

実際のところ、アイヌ語が衰退した理由を文字がない、という点に求める方も多いようですが、こうした彼らの意識を考えるとそれは間違った見解でしょう。

事実明治以降の政策的な指導によりシサム・イタク（和人の言葉）を強要されたこと、漁狩猟を禁じられたことが要因と考えるのが妥当です。

生活様式の変容により、アイヌの言葉自体が指し示すものがわからなくなり、異なる言葉の強要は彼らの文化に息づいた「意味」を奪い、次第に使うこともなくなったのです。

これは日本人である我々にもいえることですが、生活環境の変化とともに、家の構造が変わり、使う道具も少なくなり、それらを指し示す言葉も消えていきます。

文化は言葉と共に消えていくのです。

3. 狩猟民族とシャーマニズム

いわゆるアイヌの世界観はシャーマニズムの価値観で捉えられますが、一般的にシャーマニズムは「狩猟民は自然に従おうとしながらも、動物を殺さ

なくてはならない」というジレンマをもつ狩猟民的世界の中から発生したと考えられています。

そしてこれを解決するのが「不死の靈魂」と「死すべき肉体」という二元論でした。アイヌの伝統的なイオマンテの儀式にも見る事ができます。

「イ・オマン・テ―それ・行く・させる」―それを送るということで一般的に子グマが送られる儀式として知られています。クマ送りのイオマンテは四月の穴クマ狩りから始まります。

火の神、家の神にクマが自らの元に来てくれるようにとカムイ・ノミ（神への祈り）をし、スルクというトリカブトの根から抽出した毒を塗った矢と勇敢な犬を伴って出かけます。

クマがいる穴が見つかったその前にクマが出てこれられないように柵をし、神に自分の素性を伝え、感謝の意、そしてクマが暴れ狂うことのないようにという旨を唱えます。

神への祈りが終わると穴にいるクマを外におびき出し矢を射るのですが、その毒は二、三〇分で体内を回りクマは動かなくなるといいます。

そして死んだクマを確認し、熊が自らの元に戻ってきたことに再び感謝の祈りを捧げ、コタンに連れ帰り、祭壇に頭を掲げ、カムイ・ホブニレ（神の出發）という祭をします。

これらはイオマンテとは区別され、穴に生まれたばかりの子グマが一緒に